

# 生きとし生けるものが苦しみから自由でありますように

——シヨールペンハウアー哲学からみる「地獄」——

鳥越 寛生

「およそ 救われない運命の 明白なしるし、完璧な絵だ、見れば見るほどわかってくるぞ 「悪魔」のやつが いつも仕事を立派にやっていることが！」（ボードレール）

## 序

無神論者であるアルトゥール・シヨールペンハウアー（一七八八―一八六〇）は、「私たちが人生に誕生するのは涙ながらであり、人生行路は根本からして常に悲劇的であり、その終幕となるとさらに悲劇的である」（WHS, 731）という徹底した悲観論に基づき、現世を「地獄」と呼んだ。しかし、世俗化の進展により、人生の悲劇的性格を象徴する地獄の思想は世界的な規模で凋落していった。この傾向に警鐘をならし、シヨールペンハウアー哲学の再考を呼びかけた思想

家がある。

西欧の没落が暗い影を落としていた十九世紀末、ニーチェは楽天的な時代潮流のうちに人間の生の衰弱を診断し、人生の苦しみを直視する悲劇の再生を模索していた。ニーチェは「近代の衰弱文化の荒野」の只中で「恐怖の道をひたすら突き進む騎士」としてシヨールペンハウアーを称賛し、その哲学のうちにドイツ悲劇が再生する火種の燐りを嗅ぎ取っている。核兵器で幕を閉じた第二次世界大戦後、梅原猛は地獄の思想を喪失した現代日本人の文化や精神の弱さを歎じている<sup>2</sup>。そして、文化を再興するために、シヨールペンハウアー的な悲観論との対決を促している。二人の思想家によると、シヨールペンハウアー哲学との格闘により、悲劇や地獄の思想を現代的に再興し、文化や人生の強度を

取り戻すことができる。

これらの問題提起を継承して、本稿ではショーペンハウアー哲学が蔵する地獄の思想を考察する。それに当たり、最初に、ショーペンハウアー哲学が地獄思想を一望できる好位置にあることを示す(一)。次いで、利害関心に囚われた人間たちが互いに悪魔となって織りなす地獄模様を「苦悩の引き籠り」として考察する(二)。それから、地獄にありながら、自己の狭隘さを突破し、他者と共に苦しむ最中に一種の安らぎを見出したショーペンハウアーの「苦悩の共同」の思想を検討し、ショーペンハウアー哲学における「地獄」概念の真価を見定める(三)。なお、古来、キリスト教における天国と地獄や仏教における極楽浄土と地獄といった具合に、「地獄」はその真逆の世界としての天国や浄土と一組にして考えられてきたが、小論では地獄のみを扱う。それは本論が天国や極楽への希望を完全に排して、地獄を凝視することに特化したショーペンハウアー哲学を起点としていることに拠る。

### 一 地獄の思想とショーペンハウアー

近代以降、個々人の権利や自由を主張する個人主義が発

達するに従い、伝統的な地獄の思想は緩やかに衰退したと考えられている。近代化による宗教や形而上学への批判と連動して、「地獄」はその現実性を喪失し、単なるメタファーやお伽話と化したと広く理解されている<sup>3</sup>。だが、このことは必ずしも地獄思想の終焉を意味しないのではない。個人主義のアキレス腱であるエゴイズムは、人と人が悪魔のように相争う生き地獄を生み出した。とすると、近代におけるエゴイズムの発達により、「地獄」がいわゆる「生き地獄」として人間に経験可能な地平で再構築されたと理解できないか。もしそうならば、「人は他者にとつて悪魔であるに違いない」(WHL S. 663)と考えたショーペンハウアーを嚆矢として、「地獄とは他人のことだ<sup>4</sup>」<sup>4</sup>と言いつつサルトルにおいて定着したメタファーとしての「地獄」こそが、人間による人間のための「地獄の思想」の完成とも言えないか。また、この可否を保留したとしても、ショーペンハウアー哲学から地獄の思想を一望することができるのではないか。この仮説を検討するために、ここでは先ず、地獄の思想史を、ショーペンハウアーを中心として簡約する(一)。(一)から、ショーペンハウアーの「地獄」の考察の深まりを付記する(一・二)。

一・一 ショーペンハウアー哲学からみる地獄の思想史

ショーペンハウアー哲学から地獄思想の一大転換を一望できるといふ立場から、地獄の思想史の整理を試みたい。

洋の東西を問わず、地獄を死後に赴く彼岸と捉える思想が認められる。それが近代化に伴い、次第に人生の舞台である此岸に引き付けて考えられる様になる。これは単なる場所の問題ではない。人間を超越した悪魔や神によつて支配される地獄が、徐々に人間の視線によつて語られるようになる過程、人間を支配する神が後退し、人間が台頭する過程でもある。例えば、古代キリスト教においては、絶対者による最後の審判により天国に生まれる者と地獄に墮とされる者が選別されるが、この判決は未来永劫に亘つて覆らないとされていた。ところが、中世に入り、天国と地獄の中間領域として煉獄 (*purgatorium*) が表象されるようになる。それが動揺する。地獄思想については言うまでもなく、「煉獄の思想でも最良の神学者」<sup>5</sup>と評価されるダンテ『神曲』の「地獄篇」では、此岸にいる生者が彼岸の死者のために「とりなしの祈り (*suffrages*)」をすることにより、人間が神や悪魔の支配圏である彼岸に干渉できることが示唆されている<sup>6</sup>。さらに宗教改革の頃には、人間の罪が現

世の金品で贖われてすらいた。また、贖宥状に対する批判者として知られるルターにおいても、地獄の此岸への移行や神の後退と人間の台頭が認められる。すなわち、煉獄を擁護したルターの説くところによれば、「隠れた神」として神は人間の目には隠されているし、現世が地獄とみなされる<sup>7</sup>。

こうした西洋の地獄思想史の潮流を受けて、ショーペンハウアーは人間による人間のための地獄を完成している。無神論者によれば、神を立てなくとも、人は人に対して悪魔となつて、現世を生き地獄と化すことができるのである。それどころか、この生き地獄はダンテが描写した地獄を凌駕しているとまで強弁される<sup>8</sup>。ここにおいて、神を立てるキリスト教の地獄と仏教のような無神論の地獄の論理的な通路ができる。ショーペンハウアーは当時、西洋に知られたばかりの東洋思想をも包括して、後のヨーロッパで「仏教的悲観論 (*Pessimisme bouddhique*)」<sup>9</sup>として流通する独自の地獄思想を展開している。さらに、ショーペンハウアーは人間中心主義的な視点をも乗り越えている。悲観論者によると、人は人に対して悪魔であるのみならず、他の生き物に対しても紛うことなき悪魔なのである<sup>10</sup>。地獄で

苦しんでいるのは人間だけではないのである。かくして、地上のあらゆる生存の本質を受苦と看破し、「苦しみ、悩みつつ死にいくことこそお前たちの定め(Bestimmung)である」(WII S. 663)と言い放つショーペンハウアー哲学において、地獄は人間が直視すべき厳粛な現実となるのである。

#### 一・二 ショーペンハウアー哲学における地獄思想の展開

ショーペンハウアーによる「地獄」の定義としては、人間は「苦しめられる魂である一方で、悪魔である」(DHS 316)という一文が知られている<sup>11</sup>。この真意については次章で縷述するとして、ここではショーペンハウアー哲学における地獄思想の展開をpushしたい。

テキストで確認できる範囲に制限しても、ショーペンハウアーは若い時から生き地獄としての世界の悲惨に鋭敏に反応している。彼は四十四歳の時に「私が十七歳の時、誰に教えられるでもなく、仏陀がその若年期に、若い、病、苦痛、死を目にしたように、人生の悲惨に捉えられた<sup>12</sup>」ことを告げ、現実世界はすべて「生存に受苦の定めを宣告している」と理解したことを回顧している。この言葉を信賴すると、彼は少なくとも十七歳から、キリスト教的な地

獄よりも東洋的な地獄に親近感を覚えていたと考えられる。その一方で、ショーペンハウアーはダンテを繙読しており、主著の少なからぬ箇所にもダンテの「地獄篇」への評価を認めることができる<sup>13</sup>。彼は若い時から東西の地獄思想を受容していたのである。とは言え、先の引用文にあるように「誰に教えられるでもなく」、人生の悲惨を捉えたのであるから、悲観論者の地獄思想の源泉は、第一に彼自身の本性に求めなければならぬであろう。ただし、ショーペンハウアー本人が現実世界を虚心坦懐に見た結果、彼の悲観論が叙述されたのだとしても、多くの思想との対決や彼自身の体験を通して、その地獄思想が深まったことは事実であろう。わけても、主著を完成させた後の中期思想に個人主義の思想が深まったこと<sup>14</sup>に対応して、人間による人間のための地獄思想も深化していると考えられる。

#### 二 地獄における苦悩の引き籠り

先の考察により、古今東西の地獄思想が単なるメタファーへと変容する過程をショーペンハウアー哲学から一望できることが確認された。その主な論拠は、ショーペンハウアーが地獄を、絶対者や彼岸といった超越概念に頼ることなく、

人間が人間として生きること、生み出される現実世界として叙述している点にあった。無神論者の地獄論は、彼の独自の人間観ないしは世界観を基礎としているのである。そこで、ショーペンハウアーの人間観を押えてから(二・二)、そこから導き出される地獄を凝視する(二・二)。

## 二・一 nihil cognitum quin praevoltum

ショーペンハウアーの人間観は、その主著とされる『意志と表象としての世界』(1819)という書名に端的に示されている。彼は、各人が各様に認識する世界を、主観が表象する客観と規定する。ここにおいて既に、人間の認識は、個々の認識主観が表象する客観に過ぎないということ、つまり、私たち人間は物そのものを完全に認識することはできず、常に物の現われである客観を「今ここ」という時空の制約を受けながら表象していることが指摘されている。これに加え、ショーペンハウアーは、私たち人間は「生きんとする意志 (Wille zum Leben)」を本質とし、それに囚われていると考える。別言すれば、人間は生存のための利害関心 (Interesse) に支配されたエゴイストであり、私たちが表象する世界は絶えず利害関心に染まり、歪曲しているのであ

る。それゆえに、人間は生存に関係する快楽や苦痛をもたらすものには敏感に反応し、注目する反面、利害関心を惹かない「どうでもよいもの」には注意しない。私たち人間は、生きんとする意志に従って、表象としての世界を認識しているのである。

この教説は抽象的な認識論ではない。ショーペンハウアーは「生きんとする意志」が現実世界に具体化したものとして「身体 (Leib)」を考えている。これにより、私たちが身体によって直に感じる生きた現実が「意志と表象としての世界」となる。先述した意志に囚われた認識が、身体に囚われた認識とも言い換えられる。こうして、自己の身体に苛まれ、執着する人間存在が鋭く抉り出される。例えば、私たちの生きんとする意志は、身体を維持する糧を求める食欲としても現れる。この盲目な力は、私たちが実際に飢えている時だけでなく、飽食している時にさえ働く。限らない食欲が、有限な身体の制限を超えて働くのである。そのため、私たちは飽食していたとしても、自身の食道楽を切り詰めてまでして、飢えに苦しむ人に施しをすることを躊躇するし、場合によっては傍観することさえできてしまう。しかも、他者の飢えを傍観することは、悪魔的であっ

たとしても、不正とされないのである<sup>15</sup>。この様に、意志は身体と認識を支配し、心を薄情にする。言い換えれば、私たちは自己の利害関心に即したものに釘付けになり、利害関心を魅かないものを「どうでもよいもの」とみなしてしまうのである。しかも、このことを頭で理解していても、欲求やそれと一体化した身体は、事毎に認識に作用することで、言わば事物に「マーマーのヴェール」をかけて私たちを誘惑するのである。ここで重要なのは、私たちはヴェールに左右されていることを知っていることである。他ならぬ自身の意志が、自身に都合の悪い認識にヴェールをかけているのである。先の例で言えば、私たちは飢えて苦しむ他者をどうでもよい他人として見て見ぬフリをしているのである。

要するに、私たちは「自己が欲求するものを認識する」(WI S.346)のである。言い換えれば、人間は「予め欲求しないものを認識しない」(nihil cognitum quin praevoitum)<sup>16</sup>のである。しかも、悲観論者によると、私たちの本質から湧き出る欲求を「外からの働きかけや教化によって変えることは決してできない」(WI S.347)のであるから、私たちは常に確信犯として、生きんとする意志、つまりは私たちの

利害関心に従っているのである。

## 二・二 個人主義の徹底と苦悩の引き籠り

「意志と表象としての世界」として示されるショーペンハウアーの人間観の要点は、人間は「予め自身が欲求しないものを認識しない」ということであつた。この命題から導き出される「地獄」はどのようなものであるか。

悲観論者の「予め自身が欲求しないものを認識しない」という命題は、意欲する身体存在としての人間の「個人主義<sup>17</sup>」を強力に基礎づける。殊に、個人主義の闇の部分となりうる利己主義の醜悪さを露わにする。すなわち、自己が欲求するものしか認識しないエゴイストは、自身の欲求を充足することに専心し、他者を道具や手段として使用する一方で、自己の欲求が阻害されたり、自身が僅かでも傷つけられたりすることに耐えられない。たとい我を通すことで阻害される他者の苦悩を知っていても、エゴイストは自己の欲求を充足する幸福を容赦なく追求し、苦しむ他者の苦悩から目を逸らすのである。このようなエゴイストの世界では、苦しみという世界の闇に目が向けられることなく、それゆえに自己の罪悪が反省されることなく、また世

界の苦しみを真剣になくそうと思慮されることもなく、幸福を求めて人間同士がひたすら確信犯として悪魔となつて争い、苦しめ合うことになる。それなのに、個々人は自分一人だけ束の間の幸福を得ているか、もしくは幸福を実現する途上にあると夢見て、安心すらしているのである。こうして個人主義の生き地獄が完成する。この様子をショーペンハウアーは、苦海の只中で利己主義に囚われて小舟に安座する人に喩えている。

四方八方果てしなく、聳えてはまた碎ける怒涛の咆哮し荒れ騒ぐ大海で、か弱い乗り物ながらそれを頼りとしてはしけの上に安座している舟人のように、人間は一人一人、もろもろの苦悩に満ち溢れた世界の真只中に、個体化の原理、すなわち個人がもろもろの事物を現象として認識する仕方を支えとし、頼りとしながら、安らかに座っているのである。限りのない過去にわたり、限りのない未来にわたり、いたるところで苦しみに満ち溢れた果てしない世界などというものは、彼にとっては他人事である。それどころか、一篇のお伽話である。(WIS. 416f.)

世界の苦しみを「他人事 (fremd)」や「お伽話 (Märchen)」としてしか受け止められない個人主義の極致では、人間の苦悩や孤独は公的な世界の中で隠される。個々人は私的な苦悩の感情に顔を歪めているのであるが、その苦悩を背負いきれないために、他者に対して薄情 (Hartenz) になっているのである。<sup>18</sup>興味深いことに、これは石田瑞麿が解釈している西洋人の伝統的な地獄観に酷似している。<sup>19</sup> ダンテの『地獄篇』に記されているように、地獄を信じていた中世の人々は、地獄に堕ちて苦しむことは仕方ないと考え、地獄の人々には同情することなく、傍観するのである。ただし、彼岸の地獄を冷たく静観する中世の人々は、必ずしも現世の苦しみを他人事と考えていた訳ではない。だが、彼岸の地獄を信じられず、かつ現世の生き地獄をお伽話とみなす現代の個人主義者は、自己以外には徹底的に薄情になっている、と言えよう。

皮肉なことに、他者の苦しみを悪魔的に傍観する個人主義者が跋扈する現代では、「人は人にとって狼である」がゆえに、自己の苦しみを慰め、癒してくれる他者が不在となるのである。この事態の前例を探せば、芥川龍之介の「山間広野樹下空中、何処へでも忽然として現れ」て、「一切の

事が少しも永続した興味を与へない」と説明される『孤地獄』(1916)が近いであろうが、本論では現代の生き地獄を見定めるためにあえて「苦悩の引き籠り」と呼びたい。

ところで、心身のいずれの苦しみにおいても、人がその苦しみ<sup>19</sup>の極致において孤独になることは事実であろう<sup>20</sup>。人は苦しみにおいて、ひとりで自己と向き合う定めにある<sup>21</sup>。また、艱難辛苦がない世界では、人間は精神の張りや生きがい<sup>22</sup>をなくしてしまふであろう。よつて、苦悩の引き籠りは必ずしも悪とは言いつれぬ。しかし、現代の個人主義者が引き籠りに至る過程には問題がある。彼らは、他者に対して薄情になっているのみならず、自己の苦悩でさえも直視できずにいる。自身の背負いきれない苦しみを持って余し、孤独を深めるだけなのである<sup>23</sup>。そればかりか、孤独な薄情者が他者の苦悩を眺めることは、それによつて自己の苦悩を紛らわしたり、快楽を感じたりする「残忍」に行き着く。他者の私的な苦悩への好奇心は、同情という仮面を被ることもあるが、その本質は薄情にあるのである。

### 三 地獄における苦悩の共同

先の考察により、エゴイストの孤独な地獄相が分析され

た。それを受けて、最初に、個人主義の行き詰まりを打開するヒントを「苦悩の共同」として提示する(三・一)。それから、苦悩の共同における同情と傍観の問題を「地獄の只中の祈り」という観点から考察する(三・二)。

#### 三・一 「苦悩の引き籠り」から「苦悩の共同」へ

畢竟、受苦が人間の定めであるとしても、人間がその苦悩に引き籠り、薄情や残忍になることをショーペンハウアーは肯定したのであるうか。確かに、薄情や残忍は人間が互いに悪魔となつて苦しめ合う生き地獄の条件ではある。しかし、悲観論者はその倫理学において全く別のことを説いている。それによると、人間は苦悩によつてのみ同情(Mitleid)できるのである。以後、ショーペンハウアーの同情論を「苦悩の共同<sup>24</sup>」と呼び、「苦悩」という共通の根をもつ「苦悩の引き籠り」との分岐点を見極めたい。

現世を地獄とみるショーペンハウアー哲学によれば、人間を含めてあらゆる生存者が苦しむことは、その個体差はあろうが、避けようがない真実である。従つて、苦しみを回避し、軽減し、消滅するといったことよりも、どのように苦しみを受け止め、生きればよいかという点が論究され



る。この論点によると、私たちが生き地獄で苦悩の引き籠りに陥るのは、苦悩を克服し、苦しみのない幸せな生存を実現できると夢見ていることに拠る。悲観論者によれば、「苦むことなく生きようと欲することは完全なる矛盾」(WIS. 108)である。また「自己の欲求を引き続き充足していくこと」(WIS. 729)である幸福の追求は、私たちの本質が尽きることのない欲求、生きんとする意志である以上、不可能であるばかりか、満たされることのない欲求に苛まれるために徒に人生の苦悩を増やすことである。苦悩や不幸から逃避し、幸福を追求することは「人間の生得的な誤謬」(WIS. 729)なのである。

逆に、この誤謬に気付き、苦悩や不幸から逃避することなく、それを凝視したならば、どうであるか。少なくともカント以降、人生の苦悩や罪悪の起源は、自己の外ではなくて内に求められる。カントは自己の内奥を認識することを正當に「地獄行き<sup>25</sup>」と形容した。この思想を受け継いで<sup>26</sup>、ショーペンハウアーは自己の利己心を凝視する苦しみを認めているが、この苦しみの最中に利己的で薄情な人間が私利私欲を超脱して同情する転機をも認めている。彼によると、自己のおぞましい利己心と対峙し、身をもつて

苦しんだ者は、薄情な苦悩の引き籠りを突破し、どうでもよい他者の苦悩にも同情するようになる。文字通り、「地獄を見る」ことによって、人は他者の苦しみに開眼するのである<sup>27</sup>。こうして、利己主義の地獄の只中に「苦悩の共同」が生まれる。ただし、悲観論者の同情は、苦悩する者としての人間への同情であり、それ以外の個性は度外視されている点に注意が必要である。深い受苦の体験を経て、軽佻浮薄な沙婆の底を流れる生存に本質的な「苦悩、悲惨、不安、苦痛にのみ着目」(PII.S. 215.) しているのである。他者の幸福を自己と比較して嫉妬するエゴイストとは異なり、同情する者は自己の利害関心を離れて、もっぱらこの世界の不幸や苦しみを凝視しているのである。これは尋常ではない。利害関心に囚われたエゴイストが利己を離れるには、現実の生き地獄という「認識と受苦による長き学校」(PII.S. 340.) の中で身をもつて「厳格なレッスン」(PII.S. 341.) を受けるしかない。その過程で、苦悩の引き籠りという生き地獄は徐々に「浄化過程」(PII.S. 389)としての「煉獄」(Ibid.) へと変異する。

以上の考察が大過なければ、「苦悩の引き籠り」が「生き地獄」であるのに対して、「苦悩の共同」は「煉獄」となる。

いずれにせよ、苦しむ定めにある人間は苦しまざるを得ない。しかし、地獄の苦悩と煉獄の苦悩には決定的な違いがある。個々人がひたすら自己の私的な苦しみだけを苦しむ孤獨な地獄と異なり、煉獄では他者の個人的苦悩を介して現出する人生の根本的な苦しみを共にするのである<sup>28</sup>。しかもその場合、いわゆる浄化の炎に焼かれることで、卑小な利己心が徐々に殲滅される苦しみの只中の喜びや安らぎがあるのである<sup>29</sup>。

### 三・二 地獄の只中の祈りとしての同情

シヨールペンハウアー哲学における「苦悩の引き籠り」から「苦悩の共同」への転回に対応して、地獄も「生き地獄」から「煉獄」へと変容していることが明らかになった。最後に、シヨールペンハウアーの地獄（煉獄）論の真価を見定めるために、苦悩の共同の核である「同情」の実態に迫りたい。

シヨールペンハウアー哲学における同情とは具体的にどういう行為であるか。これについては、シヨールペンハウアーは必ずしも明確に記述していない。それゆえに、これまでの考察を手掛かりとして推測せざるを得ないことを予め

断っておく。

シヨールペンハウアーの「同情」について先ず指摘すべきなのは、それは薄情なエゴイストが他者の苦しみを好奇の目で眺めることとは異なるということである。自己の苦しみの根を凝視した者は、同じく苦しみの底に呻吟する者を目にする、その苦しみがよく分かり、心に沁みるのである。だが、他者の苦しみが分かったとして、人間に何ができるか。この答えは微妙である。結論から言えば、他者の苦しみを前にして同情した人間は、最終的には祈るような気持ちで傍観する他ない。ただし、利害関心に囚われたエゴイストの傍観と利害関心から離れた人の傍観との間には歴然とした違いがある。それは差し当たり、同情で偽装された残忍な眼差しと心から同情した慈愛の眼差しの差であるが、その差を苦悩の只中にある人は鋭く感取する。もしも同情に僅かでも利己的な好奇心が混じると、苦しむ者はそれを察知するであろう。人は、自己の利己心についてはあえて盲目になっっているが、他者の利己心や悪意に対しては驚くほど明敏であるからである<sup>30</sup>。

それにしても、同情は傍観以外にも、行為として示せるのではないか、と問う人もいよう。勿論、他者の身代わり

になれるならば、利害関心を離れて同情する者は喜んでその身を投げ出す。しかし、限らない欲求に端を発する他者の苦悩は、軽減することができたとしても、無くすることはできない。苦悩が生存の定めであるならば、人はどこかで自己の苦しみと向き合わざるを得ない。その幽かな一助として、苦しみを知る人の利己を離れた、物言わぬ眼差しがあるであろう。交代不可能な苦しみの底の底まで落ちた人の前では、余計な慰めの言葉ほど軽薄に響くものはない。言語を絶した苦しみを知っているならば、他者の苦しみを安直に代弁することは憚れるであろう。だからと言って、他者の苦しみが分かるために、その人を見て見ぬフリをすることもできない。とすると、自己の苦しみを見つめる他者の傍らで黙って見守る他ないのである<sup>31</sup>。この見守る苦しみは確かに苦しみであるが、そこには「湿っぽいセンチメンタル」(WIS. 469)はなく、秋晴れのようにカラッとした静寂がある。それは、利害関心に囚われて「ひたすら自らが生きる道を追求する」(WIS. 221)ことから離脱し、「佇む」(ibid.) 静けさでもある。これこそが、各人各様に苦しむ様子を好奇の目で傍観し、苦しめ合う地獄と一線を画した煉獄における同情の核心であろう。

こうした同情の在り方を、言葉のうえでは「傍観」と表現せざるを得ない。とは言え、孤独な地獄に引き籠った利己主義者同士の嫉妬や悪意の混じった残忍な傍観と煉獄に佇む利害関心を離れた者の同情的な傍観は全く別の次元にある。前者は怒りや嫉妬を生むであろうが、後者は怒りや嫉妬を鎮めるのである<sup>32</sup>。地獄の火炎を鎮める雨水のように<sup>33</sup>、苦しむ他者に同情する無関心な傍観者を、ショーペンハウアーは「世界克服者」(WIS. 456)と呼んでいる。と言うのも、自己の利害関心を離れるということは、利己心が渦巻く沙婆世界を超越しているということでもあるからである。その人は世界を克服しているがゆえに、「無世界(Keine Welt)」(WIS. 486)にいたのであるが、これまでの考察に即せば、「閉ざされた孤独な地獄を克服した煉獄にいる」とも言えるであろう。煉獄に立つ世界克服者は、地獄の底に呻く者は言うまでもなく、苦悩の引き籠りにあって苦しみを偽装している者にさえ、黙って慈眼<sup>34</sup>を向け続けている。世の柵から開放された世界克服者だからこそ、人知れず苦しむ者に気づき、彼らに寂とした慈愛の目を向け、「生きとし生ける者が苦しみから自由でありますように」(BS 236)と祈り<sup>35</sup>を献げることができるのであろう。こうした

「世界克服者の静かで目立たない行状」(Wt.S. 456)は、利害損得を離れているがゆえに、利己的な人間には無為に映るであろうし、人の非力さを象徴してさえいる。だが、祈りが届かない孤独な他者がいる、ということこそ、煉獄とは異なる地獄があるということの証でもある。妙な話ではあるが、自己に引き籠る孤独な地獄があるからこそ、地獄をみることで他者の孤独地獄に気づいた者たちの嚴肅で悲痛な呼びかけ<sup>36</sup>や祈りがある、とも言えよう<sup>37</sup>。また、人の力ではどうにもならない他者の孤独地獄があるからこそ、祈りが通じ、他者と苦悩を共にできることが「神秘」(E.S. 209)と呼ばれるのであろう。

## 結

ショーペンハウアー哲学から「地獄」を見直した結果、エゴイストの地獄相が明らかになった。悲観論者によると、生存のための利害関心に囚われた人間は、薄情にも他者の苦悩を他人事とみなして、自己の苦しみに引き籠りつづける。この孤独な苦悩の引き籠りを突破するには、文字通り、地獄をみるしかない。しかし、それができるのは、自己認識を敢行できる一部の強き人か生き地獄の何たるかを身を以

て体験した人だけである。残りの大半の人々が苦しみから目を逸らさないためには、比喩や象徴であったとしても<sup>38</sup>、地獄が表象されなければならない<sup>39</sup>。生き地獄を直視することで、自己の苦しみにだけ注意し、他者の苦しみをお伽話とみなすエゴイズムを克服して、苦しむ他者に同情し、祈ることができるのである。この開かれた苦悩の共同には、苦悩の只中の安らぎがある。これこそが、苦海に漂う人間が望みうる最高の寂靜であろう。

## 【凡例】

一、ショーペンハウアーの著作からの引用は、ヒュブシャー版 (Arthur Schopenhauer: *Sämtliche Werke*. Hrg. v. Arthur Hübscher. 7 Bände. 4. Aufl. Mannheim: F. A. Brockhaus, 1988) のページ付けによる。引用の略号は以下の通り。

- WI = Die Welt als Wille und Vorstellung I
- WII = Die Welt als Wille und Vorstellung II
- E = Die beiden Grundprobleme der Ethik
- PI = Parerga und Paralipomena I
- PII = Parerga und Paralipomena II

註

- 1 Friedrich Nietzsche, *Die Geburt der Tragödie*, dtv/dt Grwyter, München, 1988, S. 131.
- 2 梅原猛「地獄の思想」『梅原猛著作集』第四巻、集英社、一九八一年、二八頁。
- 3 西洋における地獄の思想史については A. Adam, *Hölle, in: Historisches Wörterbuch der Philosophie Bd. 3*, Schwabe & Co Verlag, Stuttgart, 1971 が、東洋における地獄の思想史については石田瑞磨『地獄』法蔵館文庫、二〇二〇年が代表的な論考である。
- 4 サルトル「出口なし」(伊吹武彦訳)『新潮世界文学』第四七巻所収、新潮社、一九六三年、四八九頁。
- 5 Jacques Le Goff, *La naissance du purgatoire*, Gallimard, Paris, 1981. (≡ 渡辺香根夫・内田洋訳『煉獄の誕生』法政大学出版局、一九八八年、二二頁)。
- 6 アウグスティヌスの『告白』第九巻第十三章にも、死者の母への祈りが記されている。
- 7 ルターの地獄論については異説もあるうが、『ローマ書講義』第九章第三節には、「もしも地獄への委棄 (ad infernum resignatio) をなすゆえなら、浄罪を達成しない」とある。ちなみに、北森嘉蔵は「ルターのいわゆる『地獄と死』はこの現実である」(北森嘉蔵『神の痛みの神学』教文館、二〇〇九年、一四一頁)と解釈している。
- 8 「人間が遭遇する最も切実な悪の主要な源泉は人間そのものである。人間は人間にとって狼である。このことをまざまざと目にした者が、世界を地獄と見るのであり、この地獄は、人は他者にとって悪魔とならざるを得ないという点でタンテの地獄を凌駕している」(WII, S. 663)。
- 9 ヨーロッパにおける「仏教的ヘシシズム」については Frédéric Lenoir, *La rencontre du bouddhisme et de l'occident*, Fayard, Paris, 1999 に詳しい。
- 10 ショーペンハウアーは鎖に繋がれた犬の気持ちを「飼い主は私の短い生涯を地獄にした悪魔である」(PII, S. 316) と代弁している。
- 11 Vgl. A. Adam, a.a.O., S. 1169.
- 12 Arthur Schopenhauer, *Der handschriftliche Nachlass Bd. 4, 1*, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1985, S. 96.
- 13 ショーペンハウアーは「タンテが『神曲』の『地獄篇』を執筆するに当たり、現実世界に地獄の素材を見出している点を称賛する一方で、「神曲の栄名は私には誇張されているように思われる」(PII, S. 469) とも評している。
- 14 フォルケルト (Johannes Volkelt, Arthur Schopenhauer, *Seine Pörsenlichkeit, seine Lehre, sein Glaube*, Frommann, Stuttgart, 1900) は「自存性 (Aseität)」の概念と共にショーペンハウアーの個人主義が中期以降深まったと考えている。
- 15 「自身は飽食しているのに他人が餓死するのを平然と眺めることは、確かに残酷で悪魔的であるが不正ではない。

- 16 い」(WIS. 400)。  
 ウナムーノはトマス・アクイナスの「人は前もって認識していないものは一切望まないものだ」という箴言から「人は前もって望んでいないものは一切認識しないものだ」を導出している (Miguel de Unamuno, *Del sentimiento trágico de la vida en los hombres y en los pueblos*, 1913. (＝神吉敏三・佐々木孝訳『ウナムーノ著作集』第三卷、白水社、一九八三年、一三〇頁))。  
 徹底した個人主義者として知られるパラントは、個人主義の思想史のなかにシヨールペンハウアーを数えている (Gorges Palante, *Pessimisme et individualisme*, Félix Alcan, Paris, 1914)。
- 17 「誰もが皆、自身の苦悩を一杯であるか、あるいはそう思っているために、薄情になつてゐる」(PII S. 627)。  
 「先導者に伴われて地獄界を見て歩くダンテの立場はほぼ傍観者のそれであることが認められる」(石田瑞麿『悲しき者の救い』筑摩書房、一九六七年、七三頁)。  
 神谷美恵子は癩病に苦しむ患者の「苦悩のプライヴァシー」(神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、一九八〇年、十一頁)を指摘している。また、アレントは苦悩による「世界喪失」(Hannah Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago Press, London, 1988, p. 112)を考察している。
- 20 ウナムーノは「魂が病まない内は、自分が魂をもっていることに気づかない」(ウナムーノ、前掲載書、二四二頁)と考えている。また、神谷美恵子は「苦し
- 21 みというものは、したがって、人間が初めて人間の生の条件を自覚する契機なのだと思う」(神谷美恵子『人間をみつめて』みすず書房、一九八〇年、一〇九頁)と洞察している。
- 22 「誰もがしっかりとまっすぐに歩くためには、ある程度の心配、苦痛、困窮が必要なのである」(PII S. 311)。  
 ショールペンハウアーは個人主義者の苦しみの頂点として、天才の孤独と苦悩を考えている。彼によれば、「天才が脈打つ者は最も多く苦しむ」(WIS. 326)のである。  
 山下太郎「社会存在の理法―ヘーゲルとシヨールペンハウエル」公論社、一九八二年の「苦悩の共同」という表現を引き継いだ。
- 23 Immanuel Kant, *Metaphysik der Sitten*, in: *Kants Werke Bd. VI*, Walter de Gruyter, Berlin 1968, S. 441. 443. カントは天国や地獄を目に見える現象の世界ではなくて、不可視な理念の世界(叡智界)に制限している。その詳細については Hendrik Kinge, *Die Moralische Sittenlehre: Kant Über Tugend, Menschen, Engel und Gott*, De Gruyter, Berlin, 2019を参照された。
- 24 「カント哲学は、世界の悲痛が私たちの外ではなくて、内にこそ求められることを説いている」(Arthur Schopenhauer, *Der handschriftliche Nachlass Bd. I*, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1985, S. 165)。  
 「他者の苦悩は、自己の苦しみから直によく分かる」(WIS. 444)。
- 25 山田晶は孤独な地獄の思想に対して、「煉獄という思想
- 26
- 27
- 28

- 32 「同情は怒りに対する真正な解毒剤である」(E.S. 238)。なお、世界克服者が嫉妬を引き起こさないことについては鳥越覚生「人間はエゴイズムを克服できるか?」シヨールペンハウアー救済論における無関心の問題」『宗教学研究』第三十七号、宗教哲学学会、二〇二〇年を参照されたい。
- 31 「大半の人間は、たとい最も遠回しな方法や最も間接的な仕方であれ、彼らのちっぽけな虚栄心が傷つけられることに対して、あるいは彼らの最高度に貴重な自我に不利な反響を及ぼしそうなどんな事柄に対しても、繊細極まる感受性を有している」(PI.S. 479)。アウシュビッツ強制収容所を生き延びたフランクルは「共に苦悩することは意味豊かでありまた無言である。つまり、話しかけには限界がある」(V.E. Frankl, *Homo Patiens*, Franz Deuticke, Wien, 1950, S. 115) と吐露してゐる。
- 30 「火災に対する雨水のように、怒りに対して同情がある」(E.S. 238)。
- 33 ショールペンハウアーによれば、世界克服者は世界を「静かに」(ruhig) 微笑を湛えて (lächelnde) 返り見る」(WI S.462)。
- 34 レヴィナスや岩田靖夫は、苦しむものを前にして佇立するものが「他者へ善意を献げる祈り」(岩田靖夫「神なき時代の神 キルケゴールとレヴィナス」岩波書店、二〇〇一年)を「挨拶 (salut)」と呼んでゐる。
- 36 ショールペンハウアーは他者への呼びかけ (Appel) として自身の苦悩や罪悪を気付けさせる表現 (英語の my fellow sufferer やスペイン語の *compañon de miseres* など) を評価してゐる (PII.S. 323)。
- 37 神谷美恵子は「まず自ら深く悩み、慰められたことのある者でなければ他人を慰められるものではない」(神谷美恵子「存在の重み」みすず書房、一九八一年、二〇五頁) と告白してゐる。
- 38 スーザン・ソントグは戦争写真を地獄の図像学の系譜に数えてゐる (Susan Sontag, *Regarding The Pain of Others*, Straus and Giroux, New York, 2003)。
- 39 ショールペンハウアーは悪因悪果を説く形而上学的な地獄の神話を「実践理性の要請」(WI.S. 420) と呼んでゐる。  
(とりごえ かくせい・大谷大学)
- 29 ショールペンハウアーは受苦により利己心が破壊される様子を「痛みを伴う治療を施された患者が、治療の苦痛を進んで、それどころか満足して耐えるようになる」(WI.S. 470) と表現してゐる。